

# くり減収原因の調査と対策の検討

東美濃栗振興協議会は、年100t以上の栗を出荷する組織であるが、高齢化に伴う協議会員数の減少やくりの高樹齢化により、出荷量が減少傾向となっている。

対策として近年、新規栽培者の確保や改植が推進されてきたが容易ではなく、既存の協議会員の出荷量を増やすために、改めて出荷量が少ない原因の分析を行うこととした。



## 活動内容

- ①: 協議会員への栽培、出荷状況聞き取り調査
- ②: 着果数の推移と落果原因の調査

## 成果

- ①: 協議会栽培暦に準じた栽培が多いものの、施肥、防除ともにやや少ない事例が多かった。重要病害虫であるモモノゴマダラノメイガや実炭疽病の被害は、無～多発と人や場所により差が多かった。
- ②: 早生品種において、6月下旬以降落果が増加し、その多くはネスジキノカワガによる食害であることを確認。収穫期までに全着穂数の約3割が落下し、うち害虫による被害率は7～8割であった。中生品種では、8月中旬に生理落果が急増したが、原因の特定には至らなかった(表1)。

品種	生理落果率	虫害率	ほ場ロス率
胞衣	8%	18%	27%
大峰	5%	27%	32%
筑波	55%	9%	63%

表1. 品種別の落果原因率とほ場ロス率(穂数)

原因が判明した病害虫対策は、次年度の防除暦に反映する。